

# HOKUSEI@COM

2011・JANUARY

vol.11

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY  
COMMUNICATION MAGAZINE WINTER EDITION

## 北星学園大学

北星学園大学短期大学部



02-03

[特集]  
タレント  
ヒロ福地さん  
インタビュー



02-03

好きな仕事に  
就く喜びと、  
続ける苦しみ。  
そこから生まれる  
ものがある。

タレント  
ヒロ福地さん

04-05

[大谷地交流録]  
北星学園大学文学部英文学科  
江口ゼミ

走って遊んで  
英語を学ぼう!  
大谷地東小学校の  
英語教育活動を  
サポート。



06

[サークル活動]  
アメリカンフットボール部

夢への  
タッチダウンは  
続く。



07

[先生たちのその素顔]  
短期大学部  
ロバート・E・ゲティングス先生

なんでも  
やってみよう!  
なんでも  
楽しもう!



08

[HOKUSEI INFORMATION]  
北星学園大学からのお知らせ

社会人として成長していくために

社会人基礎力育成  
グランプリ予選初出場

本が結んだ縁から生まれた本の本

「高校生は  
これを読め!」  
誕生



## [特集] INTERVIEW

タレント ヒロ福地さんインタビュー

好きな仕事に就く喜びと、  
続ける苦しみ。  
そこから生まれるものがある。

ラジオパーソナリティーから  
タ方のテレビ情報番組の司会者まで、多彩なメディアで活躍するヒロ福地さん。幅広い世代から人気を集めるヒロさんに、もうすぐ社会人になるふたりの学生がインタビュー。軽妙なトークから、仕事や人生を楽しむヒントが浮かび上がってきました。

視聴者と同じ目線を忘れずに。

菅原: ヒロさんはどんなきっかけでマスメディアの世界へ入ったのですか?

ヒロ: 大学2年のとき、たまたま新聞でAMラジオパーソナリティーの募集広告を見つけたんです。とくにそういう世界に興味があったわけではなく、「受けられればカッコいいな」という軽い気持ちで受けたら合格しちゃった(笑)。でも大学生のアルバイト感覚でしたから、卒業と同時に番組も辞めてカナダに渡りました。

麻林: 就職活動で苦労した私たちとしては、辞めてしまうのはもったいないように思いますが…。

ヒロ: 一度は海外に出てみたいという気持ちがあったのと、当時は現在ほどの就職難ではなかったので楽観的に考えていましたね。帰国後しばらくは仕事がなくて、バリバリ働いている同級生たちから取り残された気分を味わった時期もありました。その後FMニュースウェーブの開局に伴いオーディションを経てDJに。その頃から「この道で生きていこう」と覚悟を決めました。



菅原: 現在はラジオだけでなくテレビの世界でも活躍されていますが、仕事をする上で心がけていることはありますか?

ヒロ: 情報を発信する側としては社会の動きやニュースを分析することも大切ですが、ぼく自身はできるだけ視聴者と同じスタンスで情報に向き合うようにしています。視聴者と同じ目線に立ち、新しい情報に対する驚きや好奇心をありのままに表現したい。そんな初心を忘れずにいたいですね。

麻林: 視聴者の声を参考にすることはありますか?

ヒロ: 職業柄、インターネットなどで良くも悪くも名指しで書かれがあります。ときにはお叱りを受けて落ち込むこともありますが、真摯に受けとめるようになります。身内や関係者が遠慮して言わないことを、第三者だからこそはっきり言ってくれることもある。それは自分自身を見つめ直し向上する上で貴重な意見だと思っています。

菅原: ラジオとテレビでは視聴者層が異なることもあると思いますが、そうした違いを意識することはありますか?

ヒロ: 仕事の中心がラジオだった頃は自分も視聴者も若かったこともあり、アクの強いキャラクターや自由なトークを売りにしていたところがありました。でも「イチオシ!」の視聴者は30~50代の主婦がほとんどです。おかげでそれまで無縁だった報道にも関わることになり、自分のキャラクターに合わないのではと自問自答していました。でも自分も視聴者も年齢を重ねていく中で、今までとは違う表現でアプローチしてもいいのではないか、と考えるようになりました。のびのびと仕事ができるようになりました。若い頃に比べるとずいぶん丸くなったと思いますよ(笑)。





## PROFILE

### ヒロ 福地

1966年江別市生まれ。大学在学中からラジオパーソナリティとして活躍。卒業後カナダに渡る。帰国後はFMノースウェーブ開局に伴いDJを担当。パワフルなトークとフレンドリーなキャラクター、独自の辛口トークで人気を博す。2003年から北海道テレビ(HTB)の情報番組「イチオシ!」(月~金)でメイン司会者を務める。

### 「イチオシ!」

HTBで月~金15:45~19:00放送中の人気情報番組。話題のニュースはもちろん、街のおいしいお店や面白い噂、旬の食材を使った料理レシピなど、北海道の暮らしに役立つ多彩な情報を生放送で発信中。



文学部  
心理・応用コミュニケーション学科  
4年 麻林 由さん  
マスコミ業界に就職予定の私にとって、ヒロ福地さんのお話はとても興味深いものでした。春からはジャーナリズムを担うひとりとして頑張ります。

文学部  
心理・応用コミュニケーション学科  
4年 菅原理恵さん  
希望した仕事に就くこと自分の適性を活かす仕事について、改めて考えさせられました。まずは就職先ができるだけ長く頑張る。それが当面の目標です。

## 「自分はこう」と決め付けず、選択肢を広げること。

麻林: いまのヒロさんから見て、私たち学生についてどのように感じますか?

ヒロ: ぼくの学生時代は社会全体が元気だったこともあり、大学の枠を超えたイベントやパーティーで盛り上がるのがすごく楽しかったんだけど、数年前に学生と話していると「仲間で楽しめればいい」「他人と関わるのが面倒」という声を聞き、ちょっと気力不足かな、と感じたことがあります。でも最近はボランティア活動やNPO活動を通じて社会と積極的に関わろうとする学生がいたり、札幌市内外の大学による合同イベント「札幌合同大学祭(ユニフェス)」が開催されたり、再び学生が元気になりつつあるのかな、と期待しています。いまの学生さんは就職活動も大変だと思うけど、学生のうちにできることはなんでも挑戦してほしいですね。どんな経験をもあとで必ず役に立つものだから…。

麻林: 幸い私たちは志望の職種に内定したのですが、大学3年の後半から就職活動を始め、40~50社ほど受けました。

ヒロ: えっ、そんなに! この厳しい時代に好きな仕事に就けるのは、社会人として最高のスタートですね。でもほんとうに大切なのは希望を叶えたあと、それをどれだけ続けていくかです。好きだと思った仕事も実際は予想と違っていたり、好きな仕事だからこそジレンマに悩むこともある。ぼく自身もそうでした。もう辞めたいと思ったこともあるけれど、最低3年は頑張ろうと思って続けるうちに、働く喜びや発見、支えてくれる人との出会いが生まれてくる。その積み重ねでここまでやってこれたのだと思います。



菅原: ヒロさんはずっと北海道を拠点に活躍されていますが、道外に新たな活躍の場を見いだそうと思ったことはありませんでしたか?

ヒロ: 考えたこともないですね。ぼくは北海道が大好きなんです。とくに札幌は都市機能が充実しているのに、クルマで30分も走れば海にゴルフにスキーに自然の中で楽しめる。こんなすばらしい街は世界中にもなかなかないと思います。好きな街で好きな仕事に打ち込み、趣味や遊びも楽しめるなんて幸せですよね。

麻林: 春から社会人として自分のライフスタイルをつくっていくのが楽しみになりました。最後に私たち学生へメッセージをお願いします。

ヒロ: 就職難といわれる昨今、好きな仕事に就きたいと焦る人も多いと思います。でも、希望にこだわるあまり自分の適性を見失い、チャンスを逃しているケースもあるのではないでしょうか。自分が求める仕事ばかりではなく、自分を求めてくれる仕事の中で楽しみを見いだせたら、それが好きな仕事になっていく。「自分はこう」と決め付けず、学生時代にたくさんの経験を重ねて、未来の選択肢を広げていってください。

菅原・麻林: 本日はありがとうございました。



北星学園大学文学部英文学科・江口ゼミ

2010.12.16

# 走って遊んで 英語を学ぼう! 大谷地東小学校の 英語教育活動をサポート。

北星学園大学の徒歩圏内にある札幌市立大谷地東小学校。

同じ大谷地エリアのご縁から、

本学文学部英文学科・江口ゼミの学生たちが  
小学校の英語教育活動をサポートする授業に  
取り組んでいます。

学校の垣根を超えて、大学生と小学生が  
英語で交流する様子をご紹介します。



## 地域に根ざした英語教育のために。

2008年、文部科学省は2011年度から小学5・6年生で必修化される英語教育活動の概要を発表しました。これを受けて全国の小学校ではそれぞれ活動実施に向けた準備・予行を行っています。とはいっても、ほとんどの小学校教員が体系的に英語を教えた経験がないため、教育の現場では実践方法を手探りしているのが現状です。こうした状況のなか、本学の江口均准教授のもとに大谷地東小学校から英語教育活動について相談が持ち掛けられました。もともとご近所同士の大谷地東小学校と北星学園大学は、

文学部心理・応用コミュニケーション学科のゼミ企画「大谷地東チャレンジ合宿」などを通じて児童と学生が交流する機会も多い間柄。江口先生も「地域に根ざした英語教育の一助になれば」と英語教育活動の支援を快諾し、ゼミ学生15名による出張授業が実現しました。現在は後期6回45分の授業を隔週で、小学校5・6年生の全クラスにて実施しています。



## 体で学ぶ子どもたちと、子どもから学ぶ学生と。

江口ゼミが実践しているのは「トータル・フィジカル・レスポンス(TPR)」という英語指導の方法です。これは幼児が母国語を習得する過程を応用したもので、英語を聞き、その言葉の意味と機能について体を使って理解していく学習法です。たとえば、指導者がハシゴに手をかけながら「Climb This」と言います。すると子どもたちは



英語の意味がわからなくてもハシゴを登りはじめます。そこで「Good!」と褒められることで「Climb=登る」という言葉の意味と機能を全身で理解し再現するわけです。子どもは発話を強要されることなく、わからなくても周りの反応を見ながら一緒に動くだけいいので、ストレスを感じずに生きた英語を全身で学ぶことができるのです。6年担任の安田太先生は「子どもたちの英語に対する反応がはっきりと変化しました。教室の授業中も『この言葉は英語で言うと○○だね、このまえ覚えたよ』といった会話がしばしば聞かれます。私たち現場の教員にとっても、TPRはとても参考になります」と語ります。一方、学生にとっても出張授業の意義はとても大きいようだ。江口先生も「学生たちは受験英語で育った世代。体で英語を学ぶという発想の転換に苦労しながらアイディアを絞り、指導した子どもたちが英語に親しんでいくようすを見るのは、大きな自信になるようです。教員志望の学生が多いので、将来に活かしてくれればうれしいですね」と目を細めます。



## 英語教育活動の新しい挑戦を、二人三脚で。

大学との連携による英語教育活動の事例は珍しく、他校からも注目を集める大谷地東小学校。一方、現在の英語教育活動は文部科学省による統一プログラムがないため、それぞれの小学校が試行錯誤している状態です。そのためクラス担任や英語教育活動担当の先生が変わると、新しい先生との間で改めて一から信頼関係を築いていかなくてはならず、共通理解の定着に時間がかかります。こうした課題も踏まえつつ、子どもたちがもっと英語と仲良くなれる学校づくりをめざして、大谷地東小学校と江口ゼミの二人三脚による英語教育活動はまだまだ続きます。



### 回を重ねることに手応えを実感しています。

文学部 英文学科 3年  
あいだ たくろう  
**相田 拓郎さん**



日本語を使わず英語だけで授業を進めるので、最初は子どもたちに理解してもらえるかどうか不安でした。使う単語や表現法を自分なりに工夫して、回を重ねることに子どもたちの反応に手応えを感じています。「英語を学ぶ場所は机だけじゃない!」—そう実感できたことは、自分自身にとっても大きな収穫です。

### 目が見えないからこそ言葉で伝え合う喜びがわかる。

文学部 英文学科 3年  
あだち あきこ  
**安達 朗子さん**



私は視覚障害者ですが、目が見えないからこそ言葉で心が通じ合う喜びを授業のたびに実感しています。授業の前に色や空間のようすなどを聞いて全体を把握し、わからないときは私から子どもたちに聞くなど、自分なりに工夫して子どもたちとの交流を楽しんでいます。子どもたちの楽しそうな声から元気をもらって、教員の夢に向かって頑張ります。

### 教える側が本気になれば子どもも本気で応えてくれる。

文学部 英文学科 3年  
てるい さちえ  
**照井 幸恵さん**



今日の授業では英語で鬼ごっこをしました。小学生とはいえ高学年なので、昔ながらの遊びについててくれるかな?と心配でしたが、みんな思いきり走って楽しんでくれました。子どもの気持ちをつかむコツは、教える側が本気で体を動かすこと。本気が伝われば子どもも本気で応えてくれるのを実感しています。



快活な江口先生の人柄そのままに、ゼミの学生もみんな明るくて仲良し。英語教育活動で培った豊かな表現力は、大きな財産となりそうです。

## CIRCLES

汗と、涙と、友情と。

### [アメリカンフットボール部]

## 夢へのタッチダウンは続く。

激しくぶつかって相手ラインのブロックを破壊し、タックルを振り切って疾走する。これぞ全知全能の格闘技！と呼びたいアメリカンフットボール。2010年度は道内1部リーグ準優勝で有終の美を飾った北星学園大学アメリカンフットボール部の活動ぶりをご紹介します。



今季1部リーグ準優勝を記念して全員集合！自信を胸に、来季は北海道制覇をめざします。

#### 堂々の1部リーグ準優勝。 最高のシーズンを糧に来季のフィールドへ。

鎧のような勇ましい防具で体を覆い、激しくぶつかり合ってタッチダウンを目指すアメリカンフットボール。アメリカでは野球やバスケットに並ぶメジャースポーツとして親しまれ、日本でも競技人口が増えてきています。とはいえ北海道ではアメフト部のある高校は2校のみ。つまり道内大学のアメフト部員のほとんどが初心者からスタートするわけで、北星学園大学も例外ではありません。キャプテンの山下さんは元柔道部、副キャプテンの牧野さんは元野球部と本学入学前のスポーツ経験はさまざまです。

「見た目のカッコ良さで入部しましたが、未知のスポーツだからこそルールが分かってくると面白くなってのめり込みました。みんな初心者だから部員同士が互いにサポートしあい、部内の雰囲気も良いです」と山下さん。牧野さんも「アメフトは適材適所のスポーツ。それぞれの体格や運動能力に適したポジションがあるので、誰でも個性を活かせるのが魅力です」と語ってくれました。ではマネージャーの目で見たアメフトの魅力とは？「躍動感と華やかさあふれるゲーム。部員がふだんより3割増しでカッコ良く見えます(笑)」と寺嶋さん。なるほど、スポーツも見た目は重要です。

1977年創部の歴史を持つ北星学園大学アメリカンフットボール部。2010年度はチームシステムを大幅に変更し、これまで不在だった各ポジション専門のコーチを配属。客観的な視点からゲームを見据えてレベルアップをはかった結果、堂々の1部リーグ準優勝を果たしました。「優勝の小樽商科大学には一歩及びませんでしたが、道内の強豪校として名高い北海道大学を下したことは大きな自信になりました」と山下さん。さらに山下さんと牧野さんを含む4名の本学選手がベストイレブンに選ばれ、個人賞を受賞。最良のシーズンを終えることができました。2011年度の目標は北海道制覇。夢へのタッチダウンはさらなる高みへ。



文学部  
心理・応用コミュニケーション学科 3年  
キャプテン 山下 友一さん



社会福祉学部  
福祉臨床学科 3年  
副キャプテン 牧野 友貴さん



経済学部  
経営情報学科 3年  
マネージャー 寺嶋 美里さん



全員で大声を出して気合いを入れ、気持ちをひとつに。試合前の大切なプロセスです。



秋季リーグ戦で札幌大学と対戦。敵をかわしてフィールド内中央を突破する牧野さん。



このキックが決まれば追加点獲得。この1点が試合を決めることもある、緊張の一瞬。



春季オープン戦で小樽商大と対戦。タックル成功を喜び合い、チームが盛り上がります。

# Featured Faculty Member

## 先生たちのその素顔

●短期大学部 ロバート・E・ゲティン gs先生●

なんでもやってみよう!  
なんでも楽しもう!



## PROFILE

ロバート・E・ゲティン gs

Robert E. Gettings

- 1952年 米国マサチューセッツ州ボストン市生まれ  
1982年 米国ローウェル大学文学部歴史学科卒業  
卒業前から1986年までローウェル市や  
ボストン市の国立歴史公園で歴史教育・  
研究などに携わる  
1984年 米国ケンブリッジ大学大学院修了  
(教育学修士)  
1987年 愛媛県宇和島南高等学校ほか11校で  
JETプログラムによる英語指導助手を  
務める  
1988年 マサチューセッツ州マサチューセツ大学  
ボストン校非常勤講師  
1990年 札幌IAY英会話学校講師  
1992年 北星学園女子短期大学(旧称)  
英文学科着任  
専任講師・助教授を経て  
現在北星学園大学短期大学部教授

### クラーク博士が創立した大学で過ごした学生時代。

ぼくは大学を卒業するまでちょっと時間がかかりました。勉強はもちろん、お金がなかったので在学中からアルバイトや仕事をしていたんです。その中で歴史の勉強に興味が湧いてきて、ボストン地方やアフリカ系アメリカ人の歴史をテーマとする博物館で歴史の研究および教育を担当していました。「Boys, be ambitious」で知られるクラーク博士が創立された大学でも学び、それがきっかけで北海道に興味を持ち、来道後にクラーク博士の弟子や開拓使お雇い外国人の研究も始めたんですよ。博物館勤務のうちに愛媛県の英語指導助手や英会話講師を経て、北海道へ来てかれこれ20年。早いものです。

### パソコンを活用した英語の授業を展開。

10年ほど前から歴史や英会話の授業にコンピュータを取り入れるようになりました。ぼくはパソコンに関してはgeek【オタク】なんです(笑)。歴史の授業ではオンライン上から歴史に関するビデオやホームページを収集して教材とし、学生が自由に選択できるようにしています。英会話の授業では、学生に自分の会話をインターネットでビデオを録音してもらいます。それをあとで見返しながら自分の弱点に気づき、それを自分で直すように練習します。大切なのは、学生が自分で選択し、自分で練習し、それを評価すること。私の役割は良い点と悪い点を指摘することではなく、学生を支援することです。このようにインターネットやビデオを使いながら学生が自分自身で自分の英語能力をアップさせる教育方法は、ここ5年ほど私の研究テーマとなっています。

### 仕事も生活も楽しめる人生。神様に感謝。

短期大学部には男子学生もいますが、女子学生の方が多く、みんな仲良し。英会話の授業でもわいわいコミュニケーションしていく雰囲気がいいですね。この間、女子学生のグループが教科書の練習をせずにおしゃべりしていたので、ぼくは少し怒ったんです。ところが近くに行って聞くと、みんな英語で話していたんですね。教科書より難しい内容を英語でしていたのでびっくりしたし、彼女たちに尊敬の念を抱きました。そのように熱心に英語を学ぶ姿勢を応援したいと思い、それから仕事が俄然面白くなりました。学生たちにとても感謝しています。ぼくにとって大学教員はベストな仕事だと思います。これから目標? 退職後の人生をエンジョイすること! パソコン、旅行、食べ歩き…好きなことをうんと楽しんで暮らせたら人生OK。「神様に感謝!」ですよ。



iPadで好きなミステリーをダウンロードして読むのが最近のお気に入り。



学生が気軽に立ち寄れるよう、テレビや椅子、雑誌なども置いてある第2研究棟。クリスマスには同僚の先生方と協力してツリーを飾ります。

## TOPICS

社会人として成長していくために

### 社会人基礎力育成 グランプリ 予選初出場

「社会人基礎力」という言葉をご存じですか？ビジネスや学校教育をとりまく環境の変化に伴い、職場や地域社会で活躍するために必要な能力のことで、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つを核としています。経済産業省では2009年より大学生を対象に「社会人基礎力育成グランプリ」を開催。講義やゼミの成果を学生が発表し、どれだけ成長したかを評価し、社会人基礎力の育成・浸透をはかっています。昨年12月17日、2010年度グランプリ北海道・東北地区予選大会が仙台市で開催され、本学経済学部経済法学科・足立ゼミが初出場しました。



(左から) 経済学部 経済法学科  
3年 阿部恭介さん、3年 中川香苗さん、3年 長谷川雅美さん、4年 泉修平さん

発表テーマは「チーム中川の挑戦—日銀とコラボの講演会で受講者のニーズとハートをがっちり掴む—」。日本銀行の現役行員に講演を依頼し、企画を練り、打ち合せを重ね細かい構成を詰め、講演会を実現していくプロセスは、学生にとってすべてが未知の体験でした。リーダーの中川さんは「社会人の方とこれほど密に接するのは初めて。企画の主旨をうまく伝えられず『みなさんは何がやりたいのか』と逆に問われて困ったことも」と苦笑い。ゼミ内でも意見や気持ちの食い違いなど、さまざまなことがありました。その中でメンバー全員が痛感したのがコミュニケーションの大切さ。相手の話をよく聴き、自分の意見をはっきり伝える。意見の相違は認めつつ、全体として最善を尽くす。こうしたコミュニケーションの積み重ねが一人ひとりの責任ある言動を育み、メンバーの絆を強めることになりました。今回は惜しくも予選通過はなりませんでしたが、これから社会人となるメンバーにとって、大きなステップとなったようです。



## BOOK

本が結んだ縁から生まれた本の本

### 「高校生はこれを読め！」誕生

昨年1月、『HOKUSEI@COM』(第9号)の誌面企画で「くすみ書房」社長・久住邦晴さんと本学図書館学生ボランティア「HONTAN」メンバーによる本の座談会が実現しました。この出会いがきっかけとなり、くすみ書房と本学の交流が活発化。やがて久住さんを中心に「HONTAN」メンバーや本学図書館職員、市内図書館関係者が編集委員会を結成し、昨年秋に『高校生はこれを読め！』(北海道新聞社)を刊行しました。

本書は、くすみ書房の名物企画「中学生はこれを読め！」の高校生版。アンケートで寄せられた千冊以上の作品を編集委員会が議論を重ねて絞り込み、541冊の推薦リストを作成しました。さらに北海道ゆかりの作家などによる寄稿のほか、図書館司書や書店員など本読みの達人97人による“これ読め”が収録されており、読みごたえ十分。高校生はもちろん、かつて高校生だった大人にとっても、今までにない視点のブックガイドとして楽しめること請け合いです。本学教員や司書がお薦めしている本も載っています。



くすみ書房社長 久住 邦晴さん



『高校生はこれを読め！』 ¥1,260  
(『高校生はこれを読め!』編集委員会編／北海道新聞社)